

満洲引揚げ女性文学研究

広島大学大学院人間社会科学研究科 教育科学専攻
教師教育デザイン学プログラム 国語文化教育学領域 王璇静

【論文の構成】

序章

- 第一節 なぜ引揚げ文学なのか
- 第二節 引揚げ文学研究の現状
- 第三節 満洲引揚げ女性という視座
- 第四節 論文の構成

第一章 解放されない「植民者」——牛島春子論

- 第一節 問題の所在
- 第二節 異民族の表象
- 第三節 満洲国という存在
- 第四節 敗戦がもたらした「解放感」——「ある旅」を中心に
- 第五節 敗戦直後に引揚げを描くこと

第二章 女性の分断とそれを乗り越えて——宮尾登美子『朱夏』論

- 第一節 問題の所在
- 第二節 綾子に与えられる女性観
- 第三節 「純潔」と「汚濁」による女の分断
- 第四節 「純潔」と「汚濁」の境界線の崩れ
- 第五節 抑圧—被抑圧構造及びその崩壊を描く

第三章 自分を書く「大陸の花嫁」——井筒紀久枝論

- 第一節 問題の所在
- 第二節 日常の断片——俳句集『望郷』
- 第三節 人生を描く——自分史『生かされて生き万緑の中に老ゆ』
- 第四節 時代を描く——書き換えられた『大陸の花嫁』
- 第五節 自分を書くということ

第四章 引揚げ女性強制中絶事件をめぐる言説——『水子の譜』と『わたしの赤ちゃん』を中心に

- 第一節 問題の所在
- 第二節 引揚げ女性強制中絶事件をめぐる言説の諸相
- 第三節 記録としての『水子の譜』——強制中絶手術を受けた女性に向けて
- 第四節 物語としての『わたしの赤ちゃん』——強制中絶手術を受けた女性と「赤ちゃん」
- 第五節 被害者の物語に含まれる多様性

第五章 死者へのポリフォニックな想像力——津島佑子『葦舟、飛んだ』論

- 第一節 問題の所在
- 第二節 幻想的な世界の死者たち
- 第四節 動物が象徴する無名の死者たち
- 第五節 「幽霊」と化する死者

第六節 スペクタクルとしての戦争記憶

結章

第一節 研究のまとめ

第二節 本論文の成果——ポストコロニアル・フェミニズムから問い直す満洲引揚げ女性

第一項 満洲引揚げ女性の同一と差異

第二項 満洲引揚げ女性をめぐるボディ・ポリティックス

第三項 満洲引揚げ女性の記憶や忘却

第三節 今後の課題と展望

参考引用文献・URL

謝辞

【要約】

本論文は満洲引揚げ女性がどのように語る・語られるのかを明らかにすることを目的とする。とりわけこれまで抑圧され、主流ではなかった女性たちの声やイメージに焦点を当てる。

敗戦前、日本は満洲、台湾、朝鮮、樺太を植民地として支配下においていた。これらの地域は一般的に「外地」と呼ばれていた。多くの日本人が本土から「外地」に移住し、その地で生活基盤を築き上げた。しかし終戦後、帝国日本の崩壊に伴い「外地」に在住していた日本人は本土に引揚げることとなった。この敗戦後に発生した非自発的で大規模な人口移動の過程では、様々な悲惨な出来事があった。戦後の日本は新たな国家を建設する試みに直面していた。となれば、戦後の日本が引揚げ体験をどのように叙述しているかを明らかにする必要がある。これにより、引揚げ体験が戦後の国家に与えた影響や、国民の共有する記憶の中でどのように位置づけられているかが理解されるためである。

300万人を超える民間人が引揚げを体験したが、戦後の長い間、引揚げの語りは忘却されたままか、あるいは宙吊りであった。敗戦後、新たに成立した日本では敗戦した日本帝国を慎重に受け継ぎ、断絶を作り出すことが重要だとされたのである。この過程における戦争の語りには、普遍的な平和主義に導く原爆や空襲による被害の語りや、和解主義に導く戦争を反省する加害者の語りが存在する。ただし、引揚げ体験はその複雑さから日本の戦争記憶の中に編成することが難しいのである。植民地の現地の人々にとって植民者の日本人は加害者であるのは疑いがない一方で、引揚げを経験した日本人は戦争の被害者でもあり、敗戦後に国から守られなかった国民であるとも見なされるのである。このような複雑な力関係が引揚げの語りには絡み合っており、その結果、引揚げの語りは加害者と被害者の明確な区別が難しい状態にあると言える。こうした引揚げに関連する複雑な要素からは、戦後直後から現在までの引揚げの語りを考察することの必要性が見えてくる。

また、引揚げ体験を持たない人々が書いた引揚げに関する作品も珍しくない。これらの書

き手は直接的な帰還者ではなくとも、歴史の中を生き、日本の歴史を受け継ぐ主体と言える。この意味で、引揚げ文学を研究することは、書き手が戦争という歴史と向き合う過程や、過去をどのように描き出すかという問いに対処することを考察することでもある。

引揚げ文学に関わる研究は一定の蓄積がなされているが、まだ触れられていない議論も多く存在している。先行論では外地で生まれた作家たちを重視しており、満洲に移民した人たちの存在が研究の視野から抜け落ちている。そして、引揚げの語りが同一性に回収されることを回避するために、引揚げ文学作品を再考することとともに、現在までの文学研究から見過ごされてきた作品を発掘することも重要である。また、引揚げは、その語り方が過去の出来事を再構築するものであるために、書かれた時点の社会的現実を反映している。そのため、戦後日本の再構築を考察する際には、文学作品が書かれた時代を考慮しつつ、引揚げに関連する文学作品を検討することが不可欠である。

研究の視座として、本論文では引揚げ文学における満洲引揚げ女性の語りに焦点を絞る。

戦争の語りを整理する時代に、引揚げに関しては母親が子供を連れて日本本土に帰国するという物語がパターン化した一方で、その他の引揚げ女性の語りは後景化していった。そのため、パターンから外れた声に焦点を当てる必要がある。

日本引揚げ女性は視点の取り方によって加害者にも被害者にも見える存在である。日本人女性は、満洲に移民生活をする時には支配者であったが、終戦後には現地で被支配者となることがあった。敗戦国の国民であったために他民族により被害を受ける可能性があった上に、女性は日本人集団の内部でも被害を受ける可能性もあった。ゆえに、女性による引揚げの語りはより複雑な様相を呈しているのである。その中でも、性的被害は回避できない問題である。山本めゆ¹は引揚げ女性が受けた性暴力について、「性暴力の様態の変化に伴って姿を現したのが、加害者と被害者の周辺に存在していた仲介者・協力者・受益者などのアクターである」と述べている。山本が論じているように、「女性はいつも戦争の最大の犠牲者」といった普遍主義的なミリタリズム批判や家父長制のなかで引揚げ女性が受けた性暴力を論じれば、「仲介者・協力者・受益者」らを免罪し、女性を常に受動的な存在として男性に対置させることになる。それにより、「集団内部のジェンダーや階級、エスニシティなど多様な差異と権力の交差」が見落されてしまう²。これを逃れるために、本論文はそうした多様な差異と複雑な権力構造を意識しながら、引揚げ女性の語りを読み解いていく。

戦時中に日本の支配下にあった満洲や台湾、朝鮮、樺太は全て「外地」と呼ばれていたが、それぞれが独特な文化、歴史、社会背景を持っていた。本論文では引揚げ文学の中でも特に満洲からの引揚げに焦点を当て、満洲からの引揚げの語りに注目した。1932年から1945年までの間に存在した満洲国は、日本帝国によって支配された傀儡国家であった。当時の満洲は五族協和という民族政策を唱え、多くの民族が共に生きる多文化・多言語の空間であった。

¹ 山本めゆ「戦時性暴力の再—政治化に向けて—「引揚げ女性」の性暴力被害を手がかりに」(『女性学』22巻、日本女性学会、2015.03、44-62頁)。

² 注2に同じ。57頁。

と同時に、満洲は実際には日本が支配していたが、表面上はある程度の独立性を持っていたと言える。満洲は日本本土の以外で新たな政治的な構想を発展させることが可能であり、日本の社会的実験室の役割を果たした。このような「独立国家」の満洲を構築するために、戦争期には、「満洲国」を支配する官僚や関東軍の軍人、建設の近代化を担当する満鉄の関係者などの統治者として満洲に移民した日本人だけではなく、満蒙開拓団として入植した多くの農業移民も存在していた。そのため、引揚げを考える時には、満洲に移民した日本人をまとめて植民者として捉えるのでは不十分だった。前述した女性の語りという観点と関わり、本研究ではそれぞれの移民体験を考慮しながら満洲引揚げ女性の語りの多様性を掴んできた。

このような「独立国家」の満洲を構築するために、戦争期には、「満洲国」を支配する官僚や関東軍の軍人、建設の近代化を担当する満鉄の関係者などの統治者として満洲に移民した日本人だけではなく、満蒙開拓団として入植した多くの農業移民も存在していた。生田美智子³は、女性が「なぜ満洲へ行ったのか」という問いに対して、「日本人風俗女性」、「満鉄関連の家族や職業婦人」、「父や夫に随伴して渡満」した女性、職業婦人と大陸の花嫁といった「自ら渡満」した女性、そして看護婦と女子挺身隊といった戦争動員された女性たちが存在すると整理している。これらの女性たちが持つ階級や生活環境などの差異を意識することが重要である。日本の敗戦後の満洲はソ連の参入で複雑な情勢に巻き込まれている。戦後日本においては、引揚げを戦争被害の物語、特にソ連軍や現地の人々から被害を受けた物語とする傾向があった。しかし、引揚げの悲惨な体験の語りには、戦争がもたらす悲劇を語るだけではなく、日本政府が日本の国民を守らなかったということを示す語りもある。松田澄子⁴は満洲に渡った女性たちの体験に注目し、「開拓民の妻となった「大陸の花嫁」および義勇軍の「寮母」となった女性たちに期待された役割について、引揚げ女性たちが受けた非合法な中絶手術、開拓団における「性の接待」について、女性史の視点から、日本の加害性を指摘している。では、彼女たちの体験は文学の視点からはどのように語られているのだろうか。

以上を踏まえて、本論文が研究対象とするのは、「官僚夫人」であった牛島春子の引揚げに関する「箏子」「ある旅」「十字路」「知子」「アルカリ地帯の町」の五作や、宮尾登美子による実体験に基づいた作品『朱夏』、「大陸の花嫁」だった井筒紀久枝が執筆した俳句句集『望郷』や自分史作品『生かされて生き万緑の中に老ゆ』『大陸の花嫁』、引揚げ女性強制中絶手術事件に関わる表現（とりわけ上坪隆の医師や看護婦の証言を基にしたドキュメンタリー『水子の譜』、鈴木政子が女性の視点から一人称で記述した自分史『わたしの赤ちゃん』）、戦後生まれの女性作家である津島佑子が書き上げた『葦舟、飛んだ』といった作品である。これらの作品を通じて、引揚げ女性を取り巻く民族及びジェンダー問題についての考察を

³ 生田美智子『満洲からシベリア抑留へ 女性たちの日ソ戦争』（人文書院、2022）。

⁴ 松田澄子「満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』第四五号、山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所、2018.3、21~36頁）。

行った。

なお、本論文は七章から構成される。

序章では、本研究の問題意識について説明した。そして、先行研究を踏まえて、本研究の課題とそれに対する研究の視座を述べる。最後に本論文の構成について述べる。

第一章は、植民地・満洲を特権階級として経験した牛島春子の小説を分析した。牛島の作品における異民族は、敵軍として恐怖の対象として描かれながらも、個人としては異民族から善意を感じたことなども書かれている。そして、作中では「満洲国」の本質が問われ続けた。とりわけ「ある旅」では異民族表象を通じて満洲国への思考が描かれ、敗戦後の解放感もテーマとなっている。彼女が感じた敗戦後の自由は、ジェンダーの枠から解放されることだけでなく、戦時日本の体制から解放されたことも含まれていた。しかし、その解放感は一時的であり、現実の厳しさと責任への気づきが存在していた。牛島は敗戦後も植民地体験と戦争責任に向き合い、終戦がもたらした自由とその限界を描いた。

戦後の日本は平和主義を標榜し、日本人は戦争被害者であるという語りが主流となった。『流れる星は生きている』の流行が示すように、引揚げの語りも例外ではない。引揚げが被害者の物語として形成されるもう一つの重要な理由は、引揚げ者が自分達を「日本のための戦争の犠牲者」として認めるよう要求していたことがある。帰国後、引揚げ者は家族に温かく迎えられたとは言えない。敗戦後の日本において狭い国土に膨大な引揚げ者を収容することは容易ではなかったし、引揚げ者の立場からも植民地から帰還した人として戦後日本社会に溶け込むことは難しかった。このような事情で、敗戦直後の日本では引揚げの物語は被害者の物語として受け入れられた。牛島は、敗戦直後に満洲という存在や日本の戦争責任といった、当時は扱いが難しかった問題について語られていた。当時注目されていなかったが、牛島の作品は引揚げ文学という枠組みからこぼれ落ちた存在として回収すべきであろう。

第二章は、宮尾登美子の『朱夏』を取り上げ、植民地および敗戦・引揚げの語りに関して分析を行った。特に、女性が受けている抑圧や暴力に焦点を当て、主人公・綾子の視点を通して描かれた他の女性像を分析し、作品の抑圧と被抑圧の問題をどのように描いたのかを検討した。『朱夏』は日中戦争から引揚げまでの時代を背景に、家父長制やびこっていた女性嫌悪を浮き彫りにしている。作中では良妻賢母教育下の女性と満洲の娼妓たちの抑圧が対比されて描かれた。しかし、「汚濁」を嫌っていた綾子の価値観は、教師であった利子が性行為と引き換えに食べ物を得る場面を目撃するという経験などを経て崩れてしまう。このように、『朱夏』では綾子の成長が描かれている。さらに、『朱夏』には敗戦で権力関係が転倒するとともに、それまで優位だった存在が被支配側の意識に目覚める構図も読み取れる。綾子は引揚げ体験を通して抑圧者であった過去の自分に直面する。

『朱夏』では日本人の引揚げが悲劇的な物語として描かれており、良妻賢母主義のもとでの抑圧や娼妓たちが受ける性的搾取という日本人女性の被害が描き出されている。しかしそれだけではなく、引揚げを描く際に娼妓たちへの関心や他民族に対する思考を含めるこ

とで、抑圧された存在を意識している。そのことにより、『朱夏』は広い意味での支配者の反省の物語として読むことができるのではないだろうか。

第三章では、「大陸の花嫁」だった井筒紀久枝の創作に焦点を当てて、句集『望郷』や、自分史『生かされて生き万緑の中に老ゆ』、自分史『大陸の花嫁』を照らし合わせ、女性主体の語りで表現された引揚げ体験を明らかにした。『望郷』では、俳句を通じて開拓民の日常生活が描かれ、庶民の生活の一断面が窺い知れる。自身の体験を綴った自分史『生かされて生き万緑の中に老ゆ』では、「私」が母の介護から戦後の体験を回想し、自らの来歴を問い直す構図をとり、私と母の関係から人生の意味を探っている。この作品の10年後、井筒はもう一つの自分史『大陸の花嫁』を発表した。『大陸の花嫁』では、日本と満洲の対立や植民地支配への反省が見られ、特に女性の立場や戦時中の結婚制度の問題が強調された。とりわけ、「妹」が日本人集団から受けた被害を告白することで、「私」自らの加害者の側面をも描いている。このことから、『大陸の花嫁』は個人の物語を超え、戦争に巻き込まれた女性たちの存在を作中に浮上させている。

これらの分析から、個人の表現は共同体の中でのアイデンティティ構築にも寄与すること、戦争体験の多様性を取り戻す重要性を示唆した。終戦から現在まで、井筒紀久枝などの体験者により戦争体験は語り継がれている。戦争を生き残った人たちは、書くことにより、自分の存在を新たに立ち上げ、亡くなった人を甦らせる。歴史の細部にある個人を可視化するために、著名な作家の作品にとどまらず、自分史などのこれまで見過ごされてきたテキストを発掘し、その表現が意味するところを考える作業は重要だった。

第四章では、引揚げ女性強制中絶事件の歴史を振り返り、文学の視点からその表現を考察した。この事件に関するわずかな作品から見ると、戦後日本においては引揚げに関わる語りは被害者の物語となる傾向がありながらも、引揚げ女性強制中絶事件に関しては引揚げの過程で女性が受けた被害よりも救護者の行動が強調されている。

引揚げ女性強制中絶事件に関する表現の中で、ドキュメンタリー『水子の譜』や自分史『わたしの赤ちゃん』に注目した。『水子の譜』は医師や看護婦の証言から、手術を受けた女性たちの苦痛を浮かびあがらせ、日本政府を批判し、それを通して引揚げ者内部の性的暴力や差別を明らかにしている。しかしながら、『水子の譜』により形成された中絶事件の主流の語りには、女性たちの被害は日本の戦争被害の証拠として利用され、引揚げ女性は客体化されてしまう危うさがある。『わたしの赤ちゃん』は、作者・鈴木政子が中絶手術を受けた引揚げ女性の戦争体験を聞き取った内容を組み込んだ自分史作品である。前者は日本政府への批判と引揚げ女性の多層的な被害を表現することに対して、後者は一人称の語りを通じて被害者女性の主体性を強調している。主人公の千代は生まれなかった赤ちゃんへの認識を通して、被害者女性の主体性を表明している。とともに、戦後にかけて赤ちゃんに罪悪感を抱え込んで生きねばならなかったという、女性たちのもう一つの被害性が読み取れる。

第五章は、津島佑子の『葦舟、飛んだ』を取り上げ、ポリフォニックな対話空間の分析を通して、戦争の記憶を継承する行為の複雑な様相を明らかにした。『葦舟、飛んだ』の特徴

は死者の象徴として描かれる幻想的な表現である。登場人物の達夫をはじめ、男性が女性のヒミツを聞くことの難しさを体現するが、物語が進むにつれて、ジェンダーの壁を越え、戦争記憶の継承または戦争中の女性の被害の聞き手となり得る可能性が示される。そして、登場人物の雪彦が持つ女性の戦争被害や胎児たちへの関心は、海洋生物の幻想的な表象を用いて表される。この場面の幻想的な表現を分析し、無名の人々の語りは単一化される傾向があり、それぞれの語る内容が聞き取られ、回収されることが難しいことを読み取った。そのほか、物語の中で描かれる「幽霊」は、無数の死者が暗闇に押しやられている様子を描いていると指摘した。

この作品では、戦後生まれの世代の幼馴染たちが「報告ごっこ」を通じて想像力を養い、戦争中の死者や戦争被害を伝承するプロセスが語られていて、戦争記憶を伝承する中での断絶が読み取れる。津島は、五人の幼馴染及び彼らの子供たちが戦争を記憶する中で変化や成長をする姿を描きながら、戦争を「架空の悲痛」として「わくわくして楽しんでいた」というような安全な位置から戦争を記憶する姿勢や、「戦いと性欲は男の本能だからな」というような本質主義的な戦争に対する姿勢を批判している。

結章では、本研究のまとめとして、各章の研究成果を総括し、本研究の結論と今後の展望について述べる。

第一章から第五章までの内容を通して、多様な満洲引揚げ女性の語りを明らかにしたとともに、引揚げ女性の間での差異を可視化した。では、満洲引揚げ女性たちの語りの複数性を通じて、何を新たに理解することができたのだろうか。結章では、ポストコロニアル・フェミニズムの視点から、これまで排除されてきた女性たちの多様な声と、抑圧された声としての彼女たちの体験がどのような意味を持つか、どのように理解すべきかを再考する。

満洲引揚げ女性について、国民の身分やジェンダーはアイデンティティ形成において重要な要素であり、相互に作用し影響を及ぼしていることが示されている。敗戦国の国民としての経験は、満洲から引揚げた女性たちに共通する要素であり、権力関係の転倒することを体験している。従って、満洲引揚げ女性は加害性と被害性とも持っていて、女性として抑圧や被抑圧の表現を文学の中で描き出した。

満洲から引揚げた女性たちは、男性からの抑圧だけでなく、階級、民族、社会システムなどの多様な要素によっても抑圧されている。女性は常に抑圧されているという一般化された批評を避けつつ、本論文では、女性への抑圧をジェンダーだけでなく、政治的、経済的、社会的、文化的、イデオロギー的な要因を組み合わせ論じている。これにより、抑圧が多方向に存在し、ジェンダーが常に優位にあるわけではないことが示される。また、女性が抑圧される側であると同時に、他の要素において抑圧する側にもなり得ることが示されている。

女性は多様な複合的要因によって抑圧されているが、中でもジェンダーに基づく抑圧は特に一般的で深刻であり、変化に乏しい。特に、女性の身体は文化的および政治的な議論において重要な視点を占める。ポストコロニアル・フェミニズムにおいては、女性の身体が経

験する抑圧の性質と、それに対する抵抗の様式を理解するために、ボディ・ポリティックスが鍵となる。この観点から、女性の身体は単なる個人的なものではなく、歴史的、文化的、政治的な力によって形成された社会的な記号として捉えられる。

満洲からの引揚げ女性に関しては、戦時中のみならず戦後においても、彼女たちの身体が私的領域から公的領域へと移行することが明らかである。ボディ・ポリティックスの視点を通じて、個人の身体とアイデンティティが、社会規範、政治的勢力、文化的価値観の中でどのように形成され、対立するかが深く理解できる。

植民地時代から敗戦後にかけて、女性の身体は、生殖政策やジェンダー規範を通じて、支配と統制の手段として活用されてきた。敗戦直後、植民地において日本人女性へのレイプなどの性的暴力は、植民地支配者への報復行為の一環として理解される。敗戦後に引揚げた女性たちが強制的な中絶手術を受けた事件を通して、女性の身体が国家の純潔を守る手段として利用されていたことが明らかになった。

満洲からの引揚げを経験した女性たちの語りにおいて、女性の身体が象徴化され、領土としての役割を担い、受動的な存在として描かれることが読み取れる。しかしながら、同時にこれら女性たちの語りからは、彼女たちが自己の主体性を回復する可能性、すなわち個々の女性の人生経験を通じて民族の物語を超越する潜在力を垣間見ることができる。

本論文の主要な対象である満洲引揚げ女性たちは、敗戦国の国民でありながらも、植民地で支配的な立場にあった女性たちである。彼女たちが戦争に巻き込まれた経験は、フェミニズムの枠組みのみでは完全には語り尽くせないものと考えられる。また、彼女たちは第三世界の女性たちとは異なる経験をしている。植民地化された国々の女性たちは、戦争において抑圧されながらも、純潔と無垢を守るとされていた。しかし、植民経験を持つ女性たちは、このような無害性の枠組みから排除され、国家とジェンダーの二重の力によって引っ張られている。日本の引揚げ女性たちにとって、戦争被害者としての自らの民族的アイデンティティを背負うことは、言説に批評性を獲得する上で容易ではないとされる。このため、従来主流の語りには当てはまらない引揚げ女性たちの作品を読み解くことは重要であり、これら排除されてきた語りは、抑圧された存在自体が抵抗の空間を生み出し、批評の可能性を持っている。これにより、本研究は引揚げ女性文学を通じて、ポストコロニアル・フェミニズムに新たな視点を提供することが可能である。

今後の研究においては、女性内部の視点に加えて、男性から女性への視点を取り入れることで、満洲引揚げの語りをより深く理解することができると考えている。さらに、満洲という地域の特異性を考慮しつつ、引揚げ文学の全体像を把握するために、日本帝国が植民地としていた台湾、朝鮮、樺太にまで視野を拡大する必要がある。これらの地域のさまざまな帰還のルートの複雑性についても、今後の研究で十分に解明していく。

【参考引用文献】

序章

- ・ 阿部安成・加藤聖文「「引揚げ」という歴史の問い方（上）」（『彦根論叢』第348号、滋賀大学経済学会、2004.5、129-154頁）
- ・ 蘭信三「帝国崩壊と戦後日本のなかの「帝国経験」（『立命館言語文化研究』29巻3号、2018.1、3-12頁）
- ・ 蘭信三編著『帝国以後の人の移動：ポストコロニアルとグローバリズムの交差点』（勉誠出版、2013）
- ・ 蘭信三編著『帝国のはざまを生きる』（みずき書林、2022）
- ・ 生田美智子『満洲からシベリア抑留へ 女性たちの日ソ戦争』（人文書院、2022）
- ・ 今泉裕美子ほか編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究』（日本経済評論社、2016）
- ・ 伊豫谷登士翁、平田由美編『「帰郷」の物語／「移動」の語り：戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』（平凡社、2014）
- ・ ヴォルフガング・シヴェルブシュ著、福本義憲・高本教之・白木和美訳『敗北の文化』（法政大学出版局、2007）
- ・ エマニュエル・レヴィナス著、シャック・ロラン編、合田正人訳『神・死・時間』（法政大学出版局、1994）
- ・ 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』（勁草書房、1971）
- ・ 加藤聖文『海外引揚げの研究：忘却された「大日本帝国」』（岩波書店、2020）
- ・ 川村湊『異郷の昭和文学―「満州」と近代日本―』（岩波新書、1990）
- ・ 厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』（厚生省、1977）
- ・ 坂堅太『安部公房と「日本」：植民地／占領経験とナショナリズム』（和泉書院、2016）
- ・ 島村恭則編著『引揚げ者の戦後』（新曜社、2013）
- ・ 釋七月子『「自分史」は語る』（晃洋書房、2020）
- ・ ジャニス・ミムラ著、安達まみ・高橋実紗子訳『帝国の計画とファシズム』（人文書院、2021）
- ・ 末益智広「藤原てい『流れる星は生きている』『灰色の丘』をめぐる「引揚げ」の記憶」（『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』330巻、千葉大学大学院人文公共学府、2018.2、20-42頁）
- ・ 末益智広「戦後日本社会における「引揚げ文学」と家族愛」（『千葉大学人文公共学研究論集』38巻、千葉大学大学院人文公共学府、2019.3、142-159頁）
- ・ 末益智広「引揚げの記憶から何が忘却されてきたのか――1960年代までの引揚げ言説――」（『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』349巻、2020.2、11-26頁）
- ・ 蘇昊明「引揚げと引揚げ文学―「満州」からの引揚げを中心に―」（『明治大学日本文学』49巻、2023.3、1-11頁）
- ・ 鄧麗霞「牛島春子の引揚げ文学」（『立命館文学』652号、立命館大学人文学会、2017.8、1274-1286頁）
- ・ 成田龍一「「引揚げ」に関する序章」（『思想』955号、岩波書店、2003.11、149-174頁）
- ・ 西成彦『外地巡礼「越境的」日本語文学論』（みすず書房、2018）
- ・ 橋本明子著、山岡由美訳『日本の長い戦後』（みすず書房、2017）
- ・ 花田俊典『清新な光景の軌跡 西日本戦後文学史』（西日本新聞社、2002）
- ・ 朴裕河『引揚げ文学論序説』（人文書院、2016）
- ・ 波田野節子「引揚げ―日本への移動：加害と被害の意識を中心に」（『国際地域研究論集』（JISRD）第11号、国際地域研究学会、2020.3、9-16頁）
- ・ 本田靖春「日本の「カミュ」たち「引揚げ体験」から作家たちは生まれた」（『諸君』、文藝春秋、1979.7、198-225頁）

- ・ 増田弘編著『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』（慶應義塾大学出版会、2012）
- ・ 松田澄子「満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』第45号、山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所、2018.3、21-36頁）
- ・ 山室信一『キメラ——満洲国の肖像』（中央公論新社、2004）
- ・ 山本めゆ「戦時性暴力の再—政治化に向けて——「引揚女性」の性暴力被害を手がかりに」（『女性学』22巻、日本女性学会、2015.3、44-62頁）

第一章

- ・ 浅野豊美「折りたたまれた帝国——戦後日本における「引揚」の記憶と戦後の価値」（『記憶としてのパールハーバー』細谷千博、入江昭、大芝亮編、ミネルヴァ書房、2004、273-315頁）
- ・ 川村湊『戦後という制度 戦後社会の「起源」を求めて』（インパクト出版会、2002）
- ・ 末益智広「藤原てい『流れる星は生きている』『灰色の丘』をめぐる「引揚げ」の記憶」（『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』330巻、千葉大学大学院人文公共学府、2018.2、20-42頁）
- ・ 末益智広「戦後日本社会における「引揚げ文学」と家族愛」（『千葉大学人文公共学研究論集』38巻、千葉大学大学院人文公共学府、2019.3、142-159頁）
- ・ 末益智広「引揚げの記憶から何が忘却されてきたのか——1960年代までの引揚げ言説——」（『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』349巻、2020.2、11-26頁）
- ・ 多田茂治『満洲・重い鎖 牛島春子の昭和史』（弦書房、2009）
- ・ 田中益三「牛島春子の戦前・戦後」（『朱夏：文化探究誌』、せらび書房、2003.6、85-101頁）
- ・ 鄧麗霞「牛島春子の引揚げ文学」（『立命館文学』652号、立命館大学人文学会、2017.8、1274-1286）
- ・ 成田龍一「「引揚げ」に関する序章」（『思想』955号、岩波書店、2003.11、149-174頁）
- ・ 成田龍一『「戦争経験」の戦後史：語られた体験／証言／記憶』（岩波書店、2010年）
- ・ 波田野節子「引揚げ—日本への移動：加害と被害の意識を中心に」（『国際地域研究論集』（JISRD）第11号、国際地域研究学会、2020.3、9-16頁）
- ・ 山室信一『キメラ——満洲国の肖像 増補版』（中公新書、2004）

第二章

- ・ 朝日新聞社編『宮尾登美子の世界』（朝日新聞社、2004）
- ・ 石川利夫「ファンゴールの真只中を生きて——宮尾登美子「朱夏上・下」を読む」（『時の法令』1274号、雅粒社、1986、44-46頁）
- ・ 井上輝子『日本のフェミニズム—150年の人と思想—』（有斐閣、2021）
- ・ 川村湊『異郷の昭和文学』（岩波新書、1990）
- ・ 小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、1991）
- ・ ニコラス・ランブレクト「宮尾登美子の満州体験と帝国の傷跡——語られる引揚げ、想起する苦しみ」（『戦後日本の傷跡』、臨川書店、2022年、36-51頁）
- ・ 波田野節子「引揚げ—日本への移動：加害と被害の意識を中心に」（『国際地域研究論集』（JISRD）第11号、国際地域研究学会、2020.3、9-16頁）
- ・ 藤本千鶴子「宮尾登美子「朱夏」——幼い母綾子の満州体験」（『國文学：解釈と教材の研究』31巻5号、學燈社、1986、117-119頁）
- ・ 水上勉、宮尾登美子「語り」文学の根」（対談）（『海』14巻1号、中央公論社、1982.1、248-262頁）

第三章

- ・ 相庭和彦、大森直樹、陳錦、中島純、宮田幸枝、渡邊洋子『満洲「大陸の花嫁」はどうつくられたか』(明石書店、1996)
- ・ 色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』(中央公論新社、1975)
- ・ 大関博美『極限状況を刻む俳句 ソ連抑留者・満洲引揚げ者の証言に学ぶ』(コールサック社、2023)
- ・ 小倉英敬『八王子デモクラシーの精神史 橋本義夫の半生』(日本経済評論社、2002)
- ・ 加納実紀代「満洲と女たち」(大江志乃夫ほか編『近代日本と植民地 5 膨張する帝国の人流』岩波書店、1993、199-222 頁)
- ・ 金丸精哉編『満洲歳時記』(博文館、1943)
- ・ 釋七月子『自分史は語る』(晃洋書房、2020)
- ・ 鈴木貞美『満洲国 交錯するナショナリズム』(平凡社新書、2021)
- ・ 西田もとつぐ『満洲俳句 須臾の光芒』(リトルズ、2020 年)
- ・ 「はっぴい俳句」URL：<http://happyhaiku.jugem.jp/?eid=46>
- ・ ビエール・ノラ編、谷川稔訳『記憶の場—対立』(岩波書店、2002)
- ・ 藤村妙子「大陸の花嫁～彼女たちはなぜ海を渡ったのか～」(『アジア現代女性史』第 8 号、アジア現代女性史研究会、2013、112-119 頁)
- ・ 古久保さくら「近代家族」としての満洲農業移民家族像：「大陸の花嫁」をめぐる言説から」(『女性学研究』巻 5、大阪女子大学女性学研究センター、1997.3、14-26 頁)
- ・ 「平和への祈り：井筒紀久枝〔略年譜〕」URL：
<https://www.balloon.ne.jp/453room/ryakunenpu.htm>
- ・ 松田澄子「満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』第 45 号、山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所、2018.3、21-36 頁)
- ・ 渡邊洋子「大陸の花嫁」(金子幸子ほか編『日本女性史大辞典』吉川弘文館、2008)

第四章

- ・ 阿部安成・加藤聖文「「引揚げ」という歴史の問い方 (下)」(『彦根論叢』349 号、滋賀大学経済学会、2004、51-67 頁)
- ・ 釋七月子『「自分史」は語る』(晃洋書房、2020)
- ・ 「北九州市自分史文学賞」URL：<https://www.city.kitakyushu.lg.jp/shimin/02100133.html>
- ・ 坪田＝中西美貴「引揚援護活動と二日市保養所—女性引揚者の沈黙のなかで」(蘭信三編『帝国崩壊とひとの再移動』、勉誠社、2011、196-205 頁)
- ・ 松田澄子「満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』第 45 号、山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所、2018.3、21-36 頁)
- ・ 山本めゆ「父の痕跡—引揚援護事業に刻印された性暴力と『混血』の忌避」(『次世代研究プロジェクト ワーキングペーパー』、京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」、2013.2、28-44 頁)
- ・ 山本めゆ「生存者の帰還—引揚援護事業とジェンダー化された〈境界〉—」(『ジェンダー研究』17 号、東海ジェンダー研究所、2015、68-91 頁)

第五章

- ・ 木村朗子「敗戦後の記憶を掘り起こす—未来の「引揚げ文学」としての津島佑子『葦舟、飛んだ』

(坪井秀人編『戦後日本文化再考』三人社、2019、320-342頁)

- ・ スーザン・ソントグ著、北條文緒訳『他者の苦痛へのまなざし』(みすず書房、2003)
- ・ 曹榮峻「連帯の共同体精神と歓待の倫理からみる津島佑子の『葦舟、飛んだ』」(『동북아문화연구』第58号、동북아시아문화학회、2019.3、201-214頁)
- ・ 高木信『亡霊論的テキスト分析入門』(水声社、2021)
- ・ 津島佑子「上坪隆一『水子の譜—引揚孤児と犯された女たちの記録』」(『太陽』、1979.11)
- ・ 中谷いづみ「疎開—津島佑子『葦舟、飛んだ』」石川巧・川口隆行編『戦争を〈読む〉』(ひつじ書房、2013、194-205頁)
- ・ 西成彦『声の文学 出来事から人間の言葉へ』(新曜社、2021)
- ・ 長谷川啓「記憶の伝承—津島佑子『葦舟、飛んだ』にみる〈疎開・引揚げ〉」(北田幸恵、水田宗子、小林富久子、長谷川啓、岩淵宏子『現代女性文学を読む—フェミニズム／ジェンダー批評の現在』アーツアンドクラフツ、2017、71-98頁)
- ・ ミハイル・バフチン著、望月哲男・鈴木淳一訳、『ドストエフスキーの詩学』(筑摩書房、1995)
- ・ 村上陽子「〈見えないもの〉をめぐる文学」(『日本オーラル・ヒストリー研究』第16巻、日本オーラル・ヒストリー学会、2020.12、105-108頁)
- ・ 村上克尚『動物の声、他者の声—日本戦後文学の倫理』(新曜社、2017)
- ・ 山田有作編『女流文学の現在』(学術図書出版、1987)

結章

- ・ Chandra Talpade Mohanty. Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses. *boundary 2*, Vol. 12, No. 3, On Humanism and the University I: The Discourse of Humanism. (Spring - Autumn, 1984)
- ・ 加藤聖文『海外引揚の研究 忘却された「大日本帝国」』(岩波書店、2020)
- ・ G・C・スピヴァク著、上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』(みすず書房、1998)